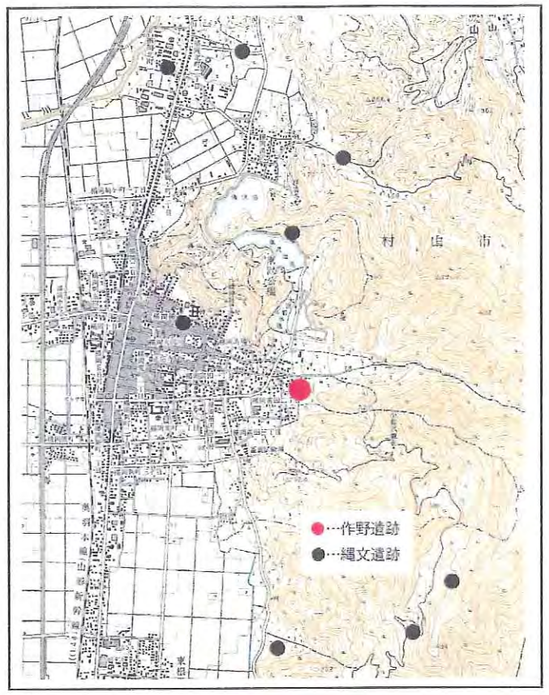
作野遺跡第3次調査説明会資料

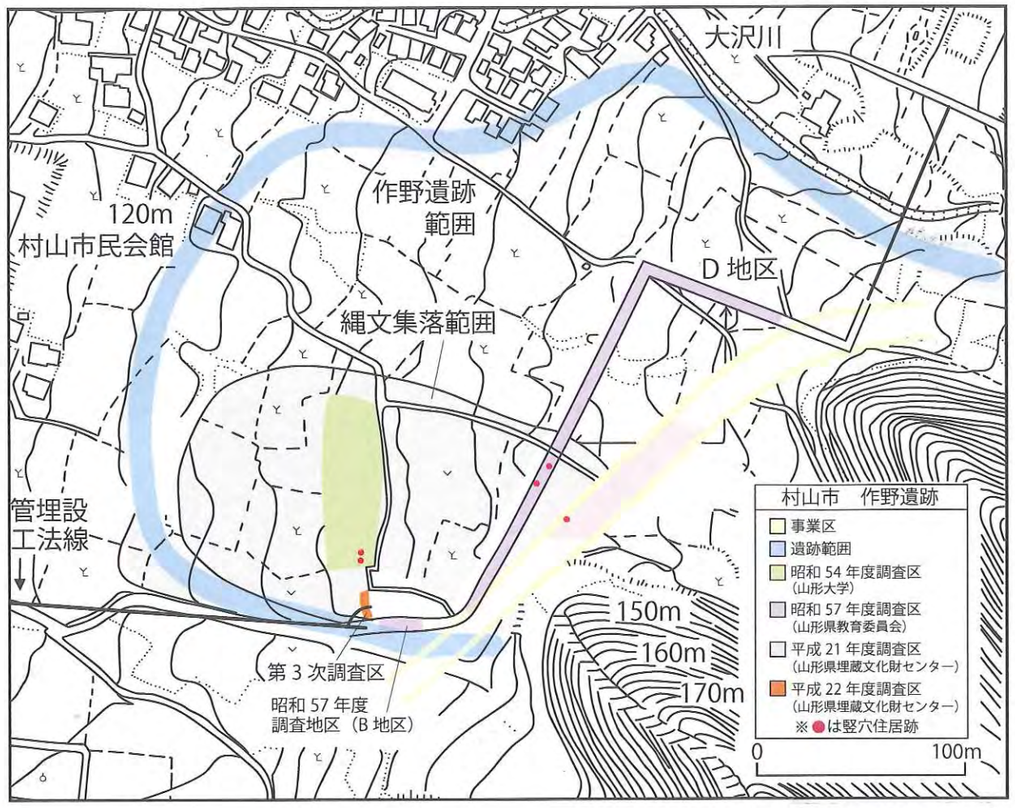
2010年８月１日（日）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査要項

遺跡名	作野遺跡（県遺跡番号№655）
所在地	村山市大字楯岡字笛田
調査委託者	村山市
調査原因	徳内・シーボルト道路改良事業
調査面積	250 ㎡
現地調査	平成 22 年７月５日～８月４日
遺跡種別	集落跡
時　　代	縄文時代晩期（約 2,500 年前）
遺　　構	柱穴・土坑・谷跡・倒木痕
遺　　物	縄文土器・石器・土偶・石刀・石棒・土冠・勾玉・玉
調査担当者	調査課長　阿部明彦
	課長補佐　黒坂雅人
	主任調査研究員　植松暁彦
	調査員　後藤枝里子
調査協力	村山市教育委員会・村山市建設課
	村山教育事務所
	県教育庁文化財保護室



遺跡位置図



遺跡概要図

調査前の状況（南から）

表土除去作業(重機導入)

面整理作業（遺構検出）

遺構の検出状況（南から）

1　遺跡概要と調査の経緯

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元住民の間では、古くから遺物が採集される地域として知られており、昭和 53 年（1978 年）に遺跡として『山形県遺跡地図』に登録されました。

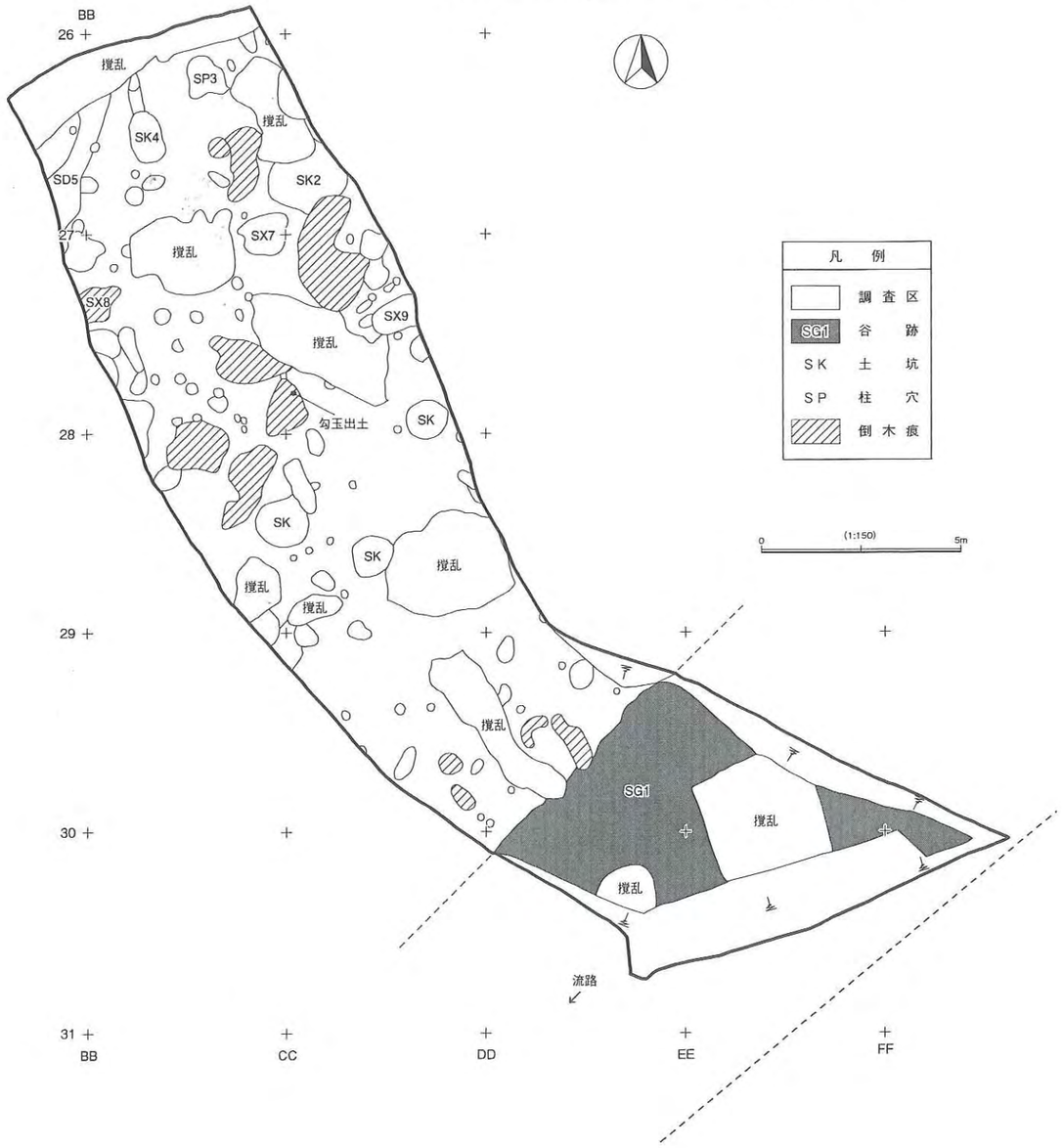
その後、昭和 54 年（1979 年）に**山形大学**が、宅地造成などに伴い、発掘調査を実施しました。縄文時代後期末～晩期（約 3,000 年前）かけての多くの遺物や竪穴住居跡２棟などを発見しました。

更に、県教育委員会が、昭和 57・58 年（1982・1983 年）に、今調査区の南側にあたる地区（現市道）で、県企業局の送水管工事に伴う**第１次発掘調査**を行い、竪穴住居跡２棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨て場」を発掘しました。

平成 21 年（2009）には、当センターが、村山市の徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴って、**第２次発掘調査**を行いました。調査では、縄文時代後期末～晩期の貯蔵穴群や、東日本では数少ない弥生時代初頭の竪穴住居跡１棟などが確認されました。特に竪穴住居跡からは、青森県や宮城県、福島・新潟県など、他地域の影響を受けた土器や祭祀(さいし))具などが出土し注目されました。

今回の調査は、昨年度の徳内・シーボルトライン道路改良事業に付設される市道部分の発掘調査です。平成 21 年 12 月に県教育委員会指導のもと村山市教育委員会が試掘調査を行い、関係機関で協議した結果、昨年に引き続き当センターが市から委託を受け、平成 22 年７月５日より**第３次発掘調査**を実施することになりました。

作野遺跡第3次発掘調査
遺構配置図(いこうはいちず)



2　検出された遺構

調査では、調査区南部で縄文時代晩期（約2,500 年前）の谷跡、調査区中央部～北部の谷の岸辺(平場)から、大型の柱穴や土坑、溝跡などの遺構が発見されました。

調査区南部の**谷跡（ＳＧ１）**は、昭和 57 年の県教育委員会の調査でも確認された谷の続きと考えられます。今回の調査では、幅約４ｍ、長さ約６ｍほどが確認され、最深部で約 1.2ｍを測り、谷の縁は急斜しています。

谷の地層は、上層(Ｆ１)・中層(Ｆ２)・下層(Ｆ３)・最下層(Ｆ３下)の大別４層に分けられます。各層からは、まとまって縄文土器や石器が多量に出土し、当時の**廃棄場（捨て場）**と考えられます。土偶や石刀・石棒、土冠(どかん)などの祭祀具も出土し、当時の水辺の**お祭りの場**も兼ねていたと考えられます。他にヒスイ製の玉など装飾品も出土しました。

特に最下層～下層は、黒色粘土層で、谷が静かに埋没し、遺物がまとまって出土しています。中層～上層は、小礫も堆積し、断続的に強い流れ(洪水)もあったようです。

なお、谷の南東角では、上層(Ｆ１)に土器が正位に設置され、**埋設土器（ＲＰ30）**の可能性があります。埋設土器は、幼児の土器棺墓で、谷の**墓域**利用も推測されます。

調査区中央～北部の谷の岸辺にあたる平場からは、大型の**柱穴（ＳＰ）**やゴミ捨て穴などの**土坑（ＳＫ）**、**溝跡（ＳＤ）**、**倒木痕跡（ＳＸ）**などが確認されました。柱穴は、当時の柱痕跡も残り、径や深さが約 80cm の大型のもので、調査区の北側に延びると考えられます。土坑は、調査区の北部で６基ほど発見され、縄文土器や蜂の巣状の凹石(くぼみいし)などが出土しました。

SP3柱穴跡の柱痕跡の土層断面（南から）

SK2土坑の精査状況（南西から）

SG1谷跡の西壁トレンチ掘り下げ状況（北東から）

SG1谷跡の上層の遺物出土状況（南から）

3　出土した遺物

出土した遺物は、ＳＧ１谷跡の上層段階で、コンテナ約 30 箱になります。ほとんどは谷跡から出土したもので、縄文時代の最終末である縄文時代晩期中・後葉（約 2,500 年前）の時期のものです。

縄文土器は、当時の流行である磨消縄文(すりけしじょうもん)を多用した流麗な入組文や、沈線で工字状に文様を付した精製品と、縄目文様のみの粗製品があります。

石器は、石を打ち割って作った打製石器が多く、狩猟具の矢じりや石槍(いしやり)、加工具の石錐(いしきり)や石ベラ、石匙(いしさじ)などが見つかりました。また、木の伐採具である磨製の石斧(いしおの)も出土しています。他に、川原石にくぼみを作ってドングリやクルミなど堅果類の破砕具に使った凹石も出土します。

生活用品以外では、当時のお祭りに使われたと考えられる、**土偶(どぐう)**の破片や、男性器を模したとされる**石刀(せきとう)や石棒(せきぼう)**などが出土しています。特に石刀や石棒は、粘板岩という石材を利用し、長い柄や刀身部を磨き上げて丁寧に作りあげています。

装飾品では、緑色の石の中心に直径２～３㎜の円孔をあけ、曲線や球形に磨かれた**ヒスイ製の勾玉(まがたま)や玉(たま)**が発見されました。ヒスイは、日本では新潟県糸魚川でのみ産出し、他地域と交流を示す資料になります。また、ヒスイ製の勾玉や玉が出土する縄文時代晩期の遺跡は、県内でも８遺跡とわずかで、これらを所有できた本遺跡が当地域の拠点的な集落であったことを推測させます。

SG1谷跡の岸辺（平場）の遺構完掘状況（南から）

SG1谷跡の上層の遺物出土状況（西から）

SG1谷跡の上層の鉢

SG1谷跡の中層の遺物出土状況（西から）

SG1谷跡の中層の鉢と浅鉢

SG1谷跡の上層の深鉢

SG1谷跡の上層の埋設土器か

SG1谷跡の中層の深鉢と浅鉢

SG1谷跡の中層の石棒（せきぼう）

SG1谷跡の中層の縄文土器(深鉢)

SG1谷跡の下層の縄文土器(深鉢)

蜂の巣状の凹石(くぼみいし)

土偶(腰部)

石刀(柄部)

石刀(刀身部)

勾玉(まがたま)

ヒスイ製の玉(たま)

SG1谷跡の調査風景(南から)

4　まとめ

今調査では、調査区南部で縄文時代晩期中・後葉（約 2,500 年前）の谷跡、調査区中央部～北部の岸辺(平場)で同時期の大型の柱穴や土坑、溝跡などが発見されました。

谷跡(ＳＧ１)は、昭和 57 年(1982)の県教育委員会の１次調査で確認された谷跡の続きと推測され、今調査では幅約４ｍ、長さ約６ｍ、深さ約１ｍの小地域から、当時の生活用品である多量の縄文土器や石器、祭祀具の土偶や石刀、石棒、装飾品のヒスイ製の勾玉や玉など多様な出土品が見つかりました。

これらは、谷の底から徐々に堆積した大別４層の地層毎に、まとまって出土しました。当時の生活用品や祭祀具、装飾品などの変化や流行などを解明することができます。

２次調査で発見された県内でも数少ない弥生時代初頭の竪穴住居跡との繋がりも明らかになることでしょう。

今調査により、弥生時代直前の、縄文時代の終末の様子が明らかになることで、米作りが始まる次代弥生時代に、県内や当地域でどのような人々の動きがあって、どのような形で稲作を受容(じゅよう)したのかを知る貴重な資料となります。

谷の北側の**岸辺(平場)**では、谷から約 15 m離れて直径約１ｍ前後の**土坑(ＳＫ)**が集中して見つかり、更に北側には建物を構成する**大型柱穴(ＳＰ)**が確認されました。

今調査区の北西側を発掘した昭和 54 年(1979)の山形大学の調査でも同時期の竪穴住居跡が確認されており、集落の主体は、更に北側に広がっていると考えられ、南北約 100mにもおよぶ大規模な集落と判断であったと考えられます。

なお、県内で数少ない新潟県産のヒスイ製の勾玉や玉類の装飾品の出土から、他地域との密接な交流があったこともうかがえます。